



なきごえ



1998

6

大阪市
天王寺動物園協会



(撮影：萩原 裕二)

- 2 — New Face カナダヅルの赤ちゃん誕生! (萩原 裕二)
- 3 — 動物と私 我が友 迷犬ミル公 (畚野 剛)
カバーウォッチング インドニシキヘビ来園 (高橋 雅之)
- 4 — 奈良公園シカ発信 (藤田 和)
- 6 — 「キーウイ飼育管理研究会」に出席して
(森本 委利)
- 8 — グラフZOO「動物園で働く人たちの作品展」から
(森本 委利)
- 10 — 公園花だより (山元 貞幸)
- 11 — ZOO DIARY (竹田 正人)

カバーウォッチング

プケコ

ツル目 クイナ科
Porphyrio melanotus

尾を振りながら、さっそうと又優雅に歩きます。必要なら上手に泳ぐこともできます。

(撮影：高橋 雅之)

||||| 動物と私 |||||

— 我が友 迷犬ミル公 —

6年前ちょうど私が会社を定年退職したすぐあとの頃、その春生まれたばかりで捨てられた小犬を、拾い主の高校生からもらいました。名前は息子の命名でミルと決めました。しばらくは小犬用のミルクを買ってきて育てました。そのときのミルク罐は、今はウンコ拾いの道具として活用しています。ミル公は柴犬もどきのオスです。毎日2回の散歩は彼の楽しみであり、また私の楽しみでもあります。気ままに育てましたので、少し野生がかついているところが、うちのカミさんにはお気に召さないようです。

たいていの犬がする仕草だと思いますが、彼はある決まった場所で、ひっくりかえって背こすりします。私は何かその場所



畚野 剛 さん
(川西自然教室リーダー)

の匂いと関係があるように思います。その一つ例は「焼けミミズ」です。夏場の住宅街は地面が焼けます。道ばたのJ字溝には、上から落ちてきたミミズの焼け死んだのが一杯です。彼はそこで恍惚状態になるのです。生きたミミズを与えても知らぬ顔ですから、焼けたり切れたりして出る匂いが必要なようです。

もう一つの場所は団地のはずれのコナラの林の斜面でした。彼は鼻を地面にこすりつけるようにして進みます。落ち葉ふかふかの所で、とつぜん背こすりを始めました。そこを調べてみますと、サンコタケという赤だいたい色の3本枝のキノコが埋もれていました。これはとても臭いしろものです。彼は別の日に、別の場所で、また同じキノコを掘り出しました。もつと良い香りの食べられるキノコでも見つけていたら、そのときはカミさんから「うちの犬は名犬」と認められ、日本初のキノコ犬になれるでしょうに。まだまだ迷犬から抜けきっていないのです。それでも彼は私の良い友達にちがいません。

(ふごの たけし)

インドニシキヘビ来園 有鱗目
ボア科

この3月、石川県のいしかわ動物園からお借りしたインドニシキヘビです。中国南部からインド、東南アジアに生息するこのヘビは、日本では昔から動物園や水族館でなじみの深い動物です。



奈良公園 シカ発信

東 大寺東塔跡で休息中の12頭のシカの小グループがいました。性別や年齢構成は不明です。グループ全体は首を腹部に埋める睡眠体勢、或いは首を地面に長く伸ばして寝ころぶような姿勢の個体、その中で1頭見張り役がいました。座ったまま首を高く持ち上げ盛んに耳を動かし、周囲を気にして緊張しています。見張り役はグループの中でどのような位置にあるのか、年齢や性別は不明です。しかし一斉に休息するのではなく、その1頭が全員のために監視役を果たしているように見えました。午後8時から午前1時までシカの休息グループは少なく、森全体が採食時間帯のように草を食べ続けていました。

飛火野の東端、藤棚付近で1頭のウサギが飛び跳ねているのを見ました。耳はやや小さく、動作は活発です。接近して確認するとノウサギでした。茶色の毛並み、敏捷な足どり、東の草むらに飛び込んでいきました。春日大社境内ではキツネが太い尻尾を垂直に立てて樹間をこちらへ向かって歩いてきます。突然立ち止まると樹木の幹に隠れ、しばらくしてまた現れて歩き回ります。見ている私達まで緊張してしまう動作の繰り返しです。

大仏前交差点付近でタヌキが2匹いました。1匹のタヌキは素早い走りから樹木に飛びつき2メートルほど駆け上がりそこで反転、頭を下に駆け下り地上1メートルくらいで地面に飛び降りました。

以 上はある団体の善意によって、ナイトスコープ(暗視望遠鏡)を借用できる機会があり、1998年4月11日奈良公園の夜間生態観察を実施したときの様子です。夜間、公園のシカたちがどのように過ごしているのか、興味のある問題でした。私達のグループは毎年夏



右側の角座(角の根もとの部分)が落ちていた。1997年12月6日 登大路にて。

と秋に泊まり場調査と呼ぶシカの夜間生態調査を実施していますが、自分たちの足元の安全とシカ観察のために懐中電灯をつけるので、シカ達は人間を感知して注意しながら人間の動きを見ている状態です。ですから真実の姿は見られません。今回初めて見た夜間のシカの生態では、野生味を失ってはいませんでした。私達の観察調査にも誤差があると思います。しかしいろいろと方法に修正を加え、継続することが、野生生物を理解して、「共生」を考える第一歩だと思っています。

奈 良公園のシカに関する報告書の中で、変形角についての研究は早くから行われています。これらはいずれも形態の変形についての研究ですが、今回は角が生えてくる時期の変化について報告させていただきます。この報告は「紀伊半島野生動物」No.4(1998)に詳細に報告されています。これは私達の仲間の一人で奈良公園のシカの観察を続け、記録をとっている人の報告です。

ニホンジカの角は毎年春に前年に生えていた角が自然に落ち、新しい角に生え変わります。この落角の時期が他のシカと比べてかなり早い時期に落ちたという記録です。1997年12月3~6日頃に、その年の10月、「角切り」で切り取られた角跡の角座(角の根もとの部分)が自然に落ちて、1998年1月7日に袋角と呼ばれる未成熟の角が伸びているのを観察、通常とは異なるその時期の早さに驚き注意して観察を続けていたところ1998年3月18日袋角状態から、角を包んでいた袋状の皮が破れて立派な角となりました。その後4月17日頃にこの個体の角切りが行われました。6ヶ月目にして2度目の角切りです。何故この現象が起こったのか今のところ不明です。外因ではなく内因とすれば、今も原因不明とされている

変形角と共に、人間との関わりの中で発生したものと推測出来ます。また近年の地球規模の異変に関連したとも考えられます。奈良公園のシカの交尾期が長期間になっていることは周知の事実ですが、交尾期の延長が出生期の延長となり、通常6月下旬~7月上旬とされていたものが



袋角が伸びてきた。1998年2月12日 登大路にて。

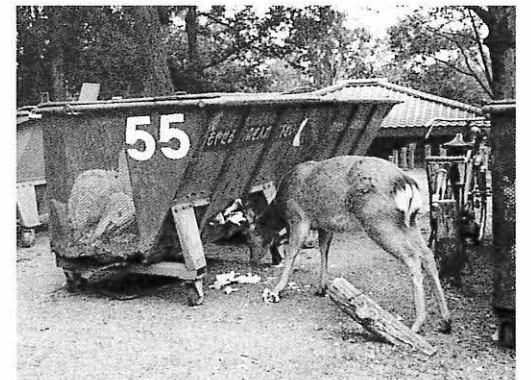


1998年3月16日 登大路にて。

11月下旬出産の報告もあり(私も11月上旬出産を現認)、これらが特異例であってくればよいのですが、出生期の延長が通常な期間となれば、いろいろと弊害が現れてくるのが予測されます。新生児は夏毛で生まれてくるので耐寒に弱いと言われますが、現在の奈良公園のように積雪もなく暖かい冬が続く限り影響を受けることは少ないと思われるものの、今後異常気象に変化があって厳冬期が続いたとき、シカ達に苦難が訪れるはずですが、そして今、予測でない別な苦難が進行しています。

そ れは人間が与えるエサの問題です。自然界では、野生動物達は自ら探すエサで生命を維持することが原則です。しかし奈良公園のシカは特殊な環境下にいます。現在頭数は生育に必要な採餌面積の許容量を超える超過密な生息状態の中にありながら、観光資源の一端を受け持っています。ところが今の日本社会では物資余り現象が何処にでも見られ、特に食糧に限ると想像を越えた余剰現象が続いています。この現象がそのままシカに及ん

でいます。元来自然界に存在しない質や量の香辛料、塩分、糖分等を含むスナック菓子、鮮魚、鶏卵等が与えられることによる糖尿病、腎臓障害、その他様々な病気がシカ達に生じています。これらは人間に例えると成人病のようなものです。公園を訪れる人々の善意で、欲しがらるから、食べるからと人間と同じ食べ物を与えるこの一連の中で、人間は食べませんが、そこらに捨てて行く食べ物を入れてきたビニール袋。シカ達は匂いの移ったビニール袋を食べ物と間違えて食べてしまいます。1度食べると消化出来ずに胃袋にとどまり、消化器障害が起こり栄養不良になり死亡する原因となります。また、別の障害、栄養過多による死亡など様々な異変がシカ達に及んでいます。これらは安易なシカとの付き合い方がシカにとって不幸を招いているということです。これは人間の善意による絶滅、その導入だと考えています。せめて雑食性の人間の消化器官と草



公園のゴミ箱をあさるシカ

食反すう動物のシカの消化器官との違いを理解して付き合っけてゆく、それが人間の出来る最低のマナーではないでしょうか。

(ゆるき代表 藤田 和)

「ゆるき」の歴史

- 1987年 「ゆるき」開設(油留木町にて)。鹿調査開始。
- 1988年 「なら・シルクロード博」開催。
- 1990年 「ディア・マイ・フレンズ」と名付ける。以降毎年夏と秋に調査が行われるようになる。調査結果報告集第1号発行。
- 1993年 「ゆるき」移転(現在の今小路町へ)。
- 1994年 「鹿いっぱい奈良公園絵地図」発行。
- 1995年 「略年表・奈良のシカ」発行。
- 1996年 「鹿いっぱい奈良公園絵地図(英語版)」発行。
- 1997年 「奈良の鹿年譜」発行。

「キーウィ飼育管理研究会」に出席して



キーウィはニュージーランド(以降、NZと略します)にのみ生息するNZの国鳥です。NZには当園が飼育しているキーウィと、コマダラキーウィ、オオマダラキーウィの3種類がみられます。その国鳥が今まさに絶滅の危機にさらされているのです。そこで今年1月29日と30日の2日間にわたり、初めてのキーウィに関する国際会議「キーウィ飼育管理研究会」がNZ保護管理グループ主催により、NZ最大の都市オークランドで開催されましたので出席してきました。研究会の会場、オークランド動物園でもキーウィをみる事ができましたが、閉会後は、1月31日から2月2日まで、NZ北島を車で巡り、2ヶ所のキーウィ飼育施設も見学しましたので、概要をお話ししたいと思います。

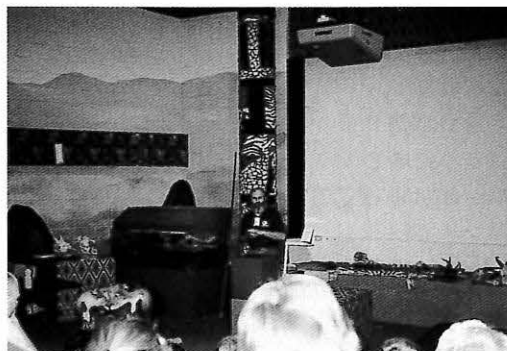
§ 研究会の目的

この研究会の最大の目的は、野生におけるキーウィの生息数を回復させるため、その回復に貢献できる飼育下での人工繁殖と管理について、明確な一定の指針作りを行うことです。今回の研究会では、当園独自には発表はしませんでした。事前にNZのキーウィ研究者から、各園の飼育下でのエサや管理条件を調べるためのアンケート調査があり、この結果がこの研究会で発表されました。私自身この情報をまず知りたいということが出席理由としてありまして、1970年以来、日本唯一のキーウィ飼育園である当園は、産卵は見られるものの、繁殖にはまだ至っていないという状況にあり、その原因が何にあるのかを探ることも重要な目的でした。

§ キーウィ飼育管理研究会

研究会は、オークランド市内にあるオークランド動物園の講堂を借りて行われました。出席者ならびに発表者は、あわせて76名。キーウィを飼育している動物園等の施設関係者、大学等からのキーウィ関連研究者、野生動物保護区を私的に運営し、キーウィの保護増殖に取り組んでいる人々、国の野生動物保護局等、ほとんどがNZ国内からの参加でした。諸外国からは、オーストラリア(タロンガ動物園)とシンガポール(ジュロンバードパーク)、

日本(天王寺動物園)の3国のみで、各1名ずつ動物園関係者の参加でした。



研究会会場風景。オトロハンガ・キーウィハウス園長のフォックス氏が発表中。(オークランド動物園にて)

研究会は2日間とも、朝は8時45分からはじまり、午前、午後各15分ずつの休憩と、約1時間ほどの昼食時間以外は、ずっと研究会の発表の連続でした。すべて英語による発表で、NZ独特のなまりが入り聞き取りは大変でした。

発表では、キーウィの基礎的なデータとして、野生および飼育下のヒナの成長率や、死亡の原因などが報告されました。とくに死因に関しては、外国からもちこまれたイヌ、ネコ、フクロギツネ(有袋類)、イタチなどによる捕食の多さが目立ちました。それによる野生キーウィの生息数の減少が多く、その対策の急務を訴えていました。すでにその1つとして、



退治のための毒餌を設置しているそうです。飼育下でキーウィの害獣となる動物を駆除するための様々な毒エサの給餌器(右)。いろいろなタイプがあり、設置のために寄付を募っていた。左の写真等は希少動物の保護の呼びかけ。(オトロハンガ・キーウィハウスにて)

の餌と栄養、施設と管理方法などアンケート調査の結果が報告され、各飼育施設により、方法は様々であるものの、飼育室には、湿気を与え、ほこりの発生をおさえるため、1日に1回ないし2回の散水は、非常に重要であることを再認識させられました。

いっぽう、NZの野生生物局の研究者は、キーウィの野生生息数回復のためのプログラムを示し、その主体として「オペレーション・ネスト・エッグ」をかかげ、すでに動物園等が加わって始動している状況を示していました。キーウィの巣をみつけ保護すると同時に、この巣から野生のキーウィの受精卵をとりあげ、人工的にふ化させ、育てるというもので、人工下であるほうが、外敵からの脅威にさらされることなく、より確実に成長させることができるというものです。

§ オトロハンガ・キーウィハウスの見学

オークランドから約200km、車で約3時間の所に、オトロハンガ・キーウィハウスがあります。この動物園は、キーウィを主体にNZならではの野鳥を展示し、負傷した鳥の保護飼育も行っていました。またムカシカゲなど、NZ固有の希少な爬虫類も飼育し、園内には、NZ自生の植物が植えられ、園路と池以外はその植物により覆い尽くされていて、森の中に迷い込んだ感じがしました。その園内を、研究会ですでお目にかかっていたフォックス園長からじきじきの案内と説明をうけました。

見学の最後に、園長は一般入園者が見られない別棟の屋外飼育舎併設のキーウィ孵卵ヒナ成育施設へ案内してくださいました。まだ幼くともオトロハンガ・キーウィハウスでは睡眠中のキーウィのヒナをのぞかせてくれた。



いキーウィのヒナを4羽(育雛箱に2羽、屋外に2羽)、オオマダラキーウィのヒナ(屋外飼育)を1羽見せてもらいました。一般展示の夜行性

動物舎は、照明がかなり暗く、天王寺と同じ種類のキーウィだけが展示されていました。ここの展示室の広さは当園の2倍はあると思われる、1歳でまだ性別が分からないヒナ3羽が、その中でよく活動していました。その展示部分の裏では、非展示のオオマダラキーウィが1羽飼育されていました。

§ レインボー・スプリングスの見学

同園はオトロハンガ・キーウィハウスから東へ約150km、車で約3時間のロトルアに位置

します。ここでは極めてきれいな水が地下からわき、その水による観光マスマス養殖場として有名です。ここでは極めてきれいな水が地下からわき、その水による観光マスマス養殖場として有名です。



育雛箱(ヒナを育てる飼育箱)から飼育係のデードリ・ベューコーさんが、かわいいキーウィのヒナ(約3週齢)を見せてくれた。(レインボー・スプリングスにて)

カシカゲほかの動物を飼育展示している所としても有名で、羊の毛刈りなどを楽しく見せ説明してくれるファームショーも見られます。同園は、キーウィの保護繁殖に熱心で、飼育係のMs.デードリ・ベューコーさんからの説明を受けることができました。ちょうど日本の方が何人かここで働いておられ、親切にさせていただくと同時に通訳までしていただいたので、キーウィの説明内容が本当によくわかりました。ここでも、野生のキーウィの抱卵中の卵を人工ふ化させ野生にもどすという、キーウィ増殖作戦の一翼をになっており、その努力がうかがえました。ふ卵器に入れられている卵は、毎日重量が計測、グラフに記入され、その減少率が適正であるか毎日確認しているのです。

世界中では自然破壊につながる開発が今も繰り返されています。自国の動物を守ろうと立ち上がったNZの人々の努力は、いつかきっと報われるに違いないと強く感じた今回のNZ行きでした。

(飼育課: 森本 委利)

動物園で働く人たちの 作品展から

春の動物と花のフェスティバル'98から始まったこの作品展は、新世界ゲート展示室で5月末まで開かれていました。そのなかで、私が気に入ったものを8点選んでみました。動物園にも、こんなにりっぱなアーティストがいるとは!! 本当に頼もしい限りです。動物園内を歩いているとこれらの作品の一部は、どこかでみられるかも知れません。

(飼育課：森本委利)



3.4 獣医師・動物病当
高見一利

5 キーウイ



対象は、当園で23年間飼育したニュージー（オス）

6 トラ



1 葉っぱのフクロウと
アケビのツルで編んだ額



1.2

飼育係・コアラ担当
早川 篤



※ストロボの反射を抑えるため、少し斜めから撮っています。
グラフZOO

あなたの扱った
その餌が
ナイスバディを
損ねます!



Don't feed our animals

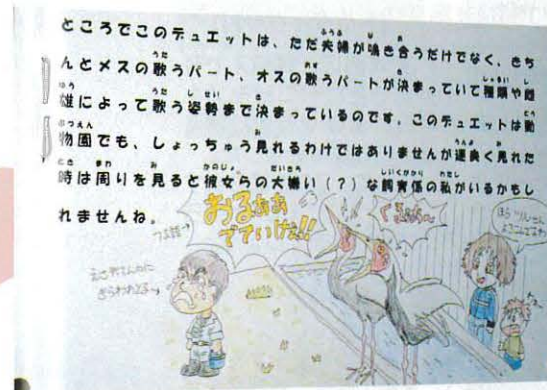
3 ニホンザル舎の制止ラベル

2 ダンボール紙製のワニと石製の鳥



4 虫についてうこと

当園雑誌「なきごえ」1998年3月号「獣医室から No.71」



7 ツルのデュエット

5.6

施設係・庶務担当
山添和雄



7.8

飼育係・爬虫類生態館
およびツル舎担当

西村慶太



8 カメの卵は気長に待とう

公園花だより ② 新温室

以前、ケヤキの広場であった所に、休憩所、温室、サクラとコニファ広場が4月1日にオープンしました。

★新温室には食虫植物、ベニヒモノキ、パイナップル、アナナス類、ストレッチャ、ゴムノキ、ヤシ類、ヘリコニア、タピトノキ、アラレア、タマシダ類、ドラセナ類、クロトン、ハナキリン等、代表的な熱帯植物を植栽しました。

以下に植栽植物の紹介をします。



ここ天王寺公園にもうひとつの温室が新しく出来ました。

4月1日にオープンした新温室の一部

食虫植物

葉緑素を持った植物は、外界から有機物をとる必要はありませんが、しかし、水中や湿地など、無機塩類の欠乏したところに生育し、根がよく発達していない植物のなかには、昆虫類を捕らえて無機塩類や窒素有機物を捕っているものがあります。このような植物を総称して食虫植物といえます。

ウツボカズラ、ネベンセス [ウツボカズラ科]

分布：ボルネオ島を中心に熱帯アジアに約70種あるそうです。種類はミクススタ、マクシマ、グラキリマ、アンブラリア、チェルソニー、ヒブリタ、インテルメディア、ダイエリアナ、ウエントリコサなどがあります。



食虫植物の代表的なウツボカズラ

ウツボカズラ属は湿った半日かげの所に生育するものが多く、虫を捕る方法は葉が変形して出来た捕虫袋のなかに虫が落ち込み、袋の内部にある消化液でその虫が消化吸収されます。

サラセニア、ヘイシソウ [サラセニア科]

分布：カリフォルニア州、オレゴン州
日本では、暑さを嫌いますので25℃まで。冬は5～8℃ぐらいで育てればよいでしょう。

種類はカリフォルニカ、レウコフィラ、ミノル、フラウア、プルブレアなど、サラセニアの葉筒内には水液があって落ち込んだ小虫を捕らえます。

モウセンゴケ [モウセンゴケ科]

モウセンゴケは表面に長いネバネバする腺毛^{せんもう}があり、虫はこの粘液について、動けなくなり、分解酵素のペプシンを分泌し、虫のタンパク質を消化し生きています。

種類はモウセンゴケ、ナガバモウセンゴケ、サジバモウセンゴケ、ナガバノイシモチソウなどがあります。

食虫植物の繁殖(増やし方)

- 1) ウツボカズラはさし木、さし穂
- 2) サラセニアは株分けを2～3月に行う。実生は秋に取りまきを行う。
*実生(みしょう)とは、種子から発芽させて育てること。
*取りまきとは、種子を取ってすぐまくこと。
- 3) モウセンゴケは株分けを2～3月に行う。種子を秋に取り、水ゴケにまきます。サラセニアと同じ。

リュウガン [ムクロシ科]

木です。実は乾けば褐色となり種子はココアやチョコレートの原料になります。カカオ脂も採れます。

ドリアン [パンヤ科]

ピンポンノキ [アオギリ科]

花は白で、実は熟すと真っ赤になり、はじけてきます。種子の外は黒で内は白です。食用で味は栗やサツマイモの生と同様の味がします。

ベニヒモノキ アカリファ・ヒスピダ [トウダイグサ科]

30年間ほど鉢植えで育ててきたベニヒモノキも、ようやく地に植えることができました。これで、3年も経ちますと、ベニヒモが1mぐらいにはなるでしょう。

なお、池には、熱帯スイレンを展示する予定です。天王寺公園へご来園の際は、新温室をぜひお訪ねください。(管理課・温室主任：山元貞幸)

4月2日

フランソワルトンの赤ちゃんが生まれました。両親の体毛と皮膚は全身黒っぽいですが、赤ちゃんの皮膚は肌色で全身金色の毛で覆われています。その後、数週間かけて徐々に黒くなります。



サンケイ新聞提供

4/4. ニホンコウノトリが今季最初の卵を産卵しました。

4月6日

チンパンジーのオス“リッキー”と母仔“プテリ”“レックス”を初めて見合わせました。これは群れ作りの最終段階として行ったもので、最初母仔は“リッキー”を怖がっていましたが、次第に慣れ、格子越しに触れ合う行動も観察されました。



—昨年生まれたブラッサグェノンのオスを仙台市八木山動物公園に贈りました。

4/7. タシギを1羽保護しました。

4/13. ニューギニアヘビクビガメの交尾を確認しました。

タンチョウが今季最初の卵を産卵しました。また、ベニジュケイが2個目を産卵しました。

4/15. マナヅルの交尾を確認しました。

4/17. ニジキジとキーウィが今季最初の卵を産卵しました。

4月19日

昨日から嘴上げ(はしあげ：ヒナが内側から卵の殻を割ること)していたカナダヅルの卵がふ化しました。これは3月14日に産卵したもので、ふ化日数は37日



今月もおもしろ情報満載

ZOO DIARY



でした。写真はふ化約2週間後のものです。

4/20. サル島で今季最初のニホンザルの赤ちゃんが生まれました。

ブラックバック3頭を東武動物公園に、2頭を宝塚動植物園に贈りました。

4/21. ホシハジロを1羽保護しました。

4月22日

夜行性動物舎でフクロモモンガの展示を始めました。フクロモモンガはカンガルーやコアラと同じ有袋類の仲間です。オーストラリアとニューギニアに生息しています。



2月から3月にかけて保護したヨシガモ1羽、ドバト2羽、キジバト1羽が元気になったので自然復帰させました。

4/24. ピューマのオスの健康診断を実施しました。血液検査や爪の伸び方、歯石除去などを行いました。引き続きピューマのメスとジャガー、ヒョウにも実施する予定です。

4/27. キョン3頭を姫路市立動物園へ贈りました。

■お知らせ■

- 動物園のおじさんのお話 「キリンのお話」
日時：7月12日(日) 午後1:00から
場所：未定
- 第24回サマースクール
7月19日(日)～25日(日)
第1組・19, 20日 第2組・21, 22日
第3組・25, 26日
- ホッキョクグマに氷柱のプレゼント
7月23日(休)

愛ある暮らし、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS



生態・飼育・図鑑が一つの本の 中にギッシリ

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？動物園での世話の仕方は？仲間とは？など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしとかいかたシリーズ<既刊本>
B5変型判・オールカラー

むしくらしとかいかた

野山でみかける身近な昆虫たち
250種を紹介。

ちいさないきものくらしとかいかた

昆虫以外の小さな生き物を320
種紹介。

お求めは、お近くの書店で。 ひかりのくに株式会社 本社/〒543-0001 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

新・きれいな色 FUJICOLOR SUPER G ACE 400



カラの大林

桜橋本店 ☎341-8091
阪急三番街店 ☎372-5031

狼と生きて 父 平岩米吉の思い出



平岩由伎子[編著] ●新刊
3,500円+税 ●限定1000部
狼と犬と猫の生態を研究し、動物文学をはじめて世に紹介した平岩米吉の波瀾に富んだ創造性豊かな生涯を娘の眼から深く描く。
夏の旅の思い出、ふしぎな巡りあわせ、動物画家・大崎善司、日本好きのスタール博士など、名品を掲載。

平岩米吉の本

狼 その生態と歴史
2,600円+税

犬と狼

●2刷出来 2,500円+税

犬の生態

●6刷 2,000円+税

犬の行動と心理

●4刷 2,000円+税

私の犬

2,200円+税

猫の歴史と奇話

2,200円+税

動物文学 復刻版 [全10巻+補巻・索引]

174,757円+税 ●限定300部(分売不可)

南方熊楠、柳田国男、小川未明……錚々たる執筆陣が数々の作品・論考を寄稿し発表した幻の戦時中資料。

築地書館 〒104-0045 東京都中央区築地7-4-201 TEL03-3542-3731 FAX03-3541-5799 (発送料一律400円)
●ご注文は、最寄りの書店または直接上記宛先まで。E-mail Address= JDH07647@niftyserve.or.jp

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分(10本常備)

- 対象/保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し郵送料510円は必要)
- 申込先/当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード(限定販売)
好評発売中 ¥800(50度用)

天王寺動物園の本 入園の記念・手引に……



オールカラー

500円 園内売店にあります。

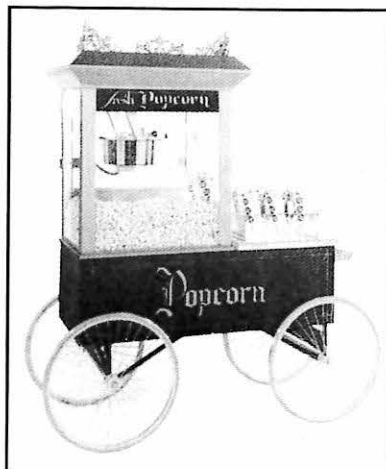
大阪市天王寺動物園協会 〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

マスターのポップコーン



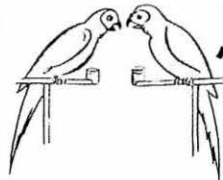
〈営業品目〉 製造機械・保温機 他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

〒561-0856
大阪府豊中市穂積1-10-30
(株)増田食品 TEL (06)865-0165





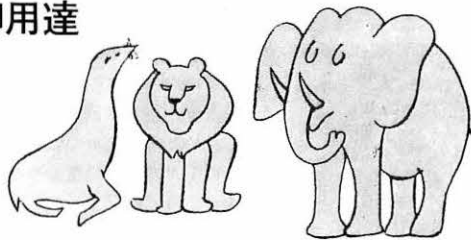
近畿 コカ・コーラ ボトリング 株式会社
KINKI COCA-COLA BOTTLING CO., LTD. <コカ・コーラ指定会社>
Coca-ColaとCokeはThe Coca-Cola Companyの登録商標です



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券250円



有限会社 吉川商会

本社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号
飼育場 兵庫県小野市来住町1513番地

電話(078)221-8195(代)

たのしい動物のお話は、
ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!



園内、主要動物舎
30数カ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回 30円

動物園内での
お食事、
ご休憩は

動物園内.....

中央売店

TEL 06-771-0973



お食事・飲み物・おみやげ 動物園内
南園売店 TEL06-771-7110



.....LOTTE.....

みんな大好き

コアラのアイス

<チョコレート> <ストロベリー>

365日、毎日毎日骨太に。



牛乳のカルシウム吸収のよさそのままに、
1本で1日分のカルシウム。



カルシウムを摂るなら牛乳や乳製品が理想的。それは、牛乳のカルシウムは、とても体に吸収されやすいからです。この牛乳のカルシウム吸収のよさはそのままに、カルシウムの量を600mg（成人1日あたりの所要量）までアップさせた、雪印毎日骨太。日本人に不足しがちなカルシウムを、効率よく補給するために、ぜひ毎日お召し上がりください。



雪印 毎日骨太

300ml・100円／希望小売価格（税別）



一日
愉快地
たのしめる

◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種のりものがあります。



久竹娛樂株式会社
TEL(06)541-3938(代)

なきごえ

1998年6月10日発行（毎月10日発行）第34巻 第6号（通巻394号）

編集 / 大阪市天王寺区動植物園事務所
発行人 / 大阪市天王寺動物園協会 伊東重朗
印刷所 / 株式会社 松村善達堂

〒943-0063 大阪市天王寺区茶臼山町6-74
電話 大阪 (06) 7 7 1 - 0 2 0 1
振替口座 00930 - 2 - 37823

編集委員 [井坂 進/中尾啓一/石井 等/中川哲男/藤田四郎/長谷川敏昭/長澤英資/山崎道正/楠原安昭/森本泰利/高橋雅之/市川久雄
中上正幸/萩原祐二/満 勇二/坂本 全/竹田正人/高見一利/山元貞幸/大野尊信/野口秀高/早川 篤/村上勇一/西村慶太/油家謙二]